

## りびんぐらいぶず 令和元(2019)年9月第2号

# 阿弥陀如来は慈悲のほとけさま

### ご讃題

其佛本願力(ごぶつほんがんにりき)

聞名欲往生(もんみょうよくおうじょう)

皆悉到彼国(かいしつとうひこく)

自致不退転(じちふたいてん)

(Ref「往觀偈」「大經下巻」、註釈版聖典 P46、「尊号真像銘文」、註釈版聖典 p645)

### はじめに

この夏、今や二足の草鞋の旅路に出ようとするとき、お一人の御門徒さんの訃報に接し、「はて」と我に返る暇もなく、お二方目の訃報に接するという、小さなお寺ではめったに遭遇しない事態に恵まれました。

今生の旅路はあたふたしながらも世の皆様のご配慮により不思議な位スケジュール調整が可能となって下さいます。

皆様のかような心根に接する程に、

「私は、世の人々に対して充分優しくあつたであろうか。」と顧みないではおれません。

一方、訃報そのものの調整は効きようがありません。如来様のお仕事だからです。

「其佛本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自至不退転」(その佛(阿弥陀仏)の本願力に乗じて、御名をお聞かせに与り「私もまた往生させて戴きとう存じます」と欲(ねが)へば、みな悉くかの国に到りておのづから不退転に至る)。(註:『銘文』に宗祖の御註釈がある)古来、「破地獄の御文」(決して地獄に落とすことがない(御文の直接的な意味は間違いなくお浄土に迎え取ろう)と言われる御文を認めて『入棺文』に納め、ご遺族と共にご遺体の胸に安置しお通夜のご法座を迎えます。

男女を問わず、暫く前まであれこれ悩み苦悩の淵に佇んでおられたでありましょうに、今生のとらわれから解放されたご遺体の何という安らかな寝顔でありましょう。人の世で最も美しい姿がここにあります。

「其佛本願力」の「其佛とは一体どなたを指して云うのですか」とゼミで質問なされたご住職がいらっしゃいました。

心優しいO先生は、一息に「阿弥陀如来」と仰せにはならず、本願力に乗じてお浄土に迎え取られて「自至不退転」と示されるが如く、弥陀同体のおさとの身となって逝かれる肉親の余地をお示しになった。

浄土真宗ならばこそ、「法」の働きを「機」の上で捉え直してお救いに与る構造理解が

どれほど今生のご縁をかけがえのないものとしてきたかを顧みずにはおれません。

お通夜のご法座は、昔は、ひっそりと地域社会で営まれて参りましたが、今日では極めて重要になって参りました。それは、亡くなられた方のご縁を通して日頃仏縁のなかった者が初めて集い合いお育てに与っていく大切な場となって来たからです。

それ故、どのようにすれば、阿弥陀如来のお慈悲をお取り次ぎできるか、これが住職の大切な課題となってきたのです。

### まず、お名号を仰がせて戴きましょうね

まずご本尊をご紹介し、ご案内するのは真っ先になすべきことです。

なぜならお名号は、阿弥陀如来(法蔵菩薩)が本願成就され、衆生にお救いの働きを及ぼされるときのお姿だったからです。

正面のご本尊は「南無阿弥陀仏」です。

「南無阿弥陀仏」の「南無」とは「帰命」、ふと仰ぎ見るお姿こそは、苦悩の有情を捨てずしてすくとお立ち下さったお姿だったと申すことができます。

むしろ、プロテスタントの「フットプリント」の逸話に親しんだ異教徒異民族の皆様にお伝えしようとするならば、南無阿弥陀仏の「南無」は、阿弥陀様が衆生を懐きとり肩車して支え立ち上って居て下さるお姿であると伝えることが効果的です。

「南無」とは如来様のお救いに与る私の姿だったからです。

御文は『大経』序文にあります。

「(如来様は)、もろもろの庶類(衆生)のために不請の友となる。群生(ぐんじょう)を荷負(かぶ)してこれを重担(じゅうたん)とす」と。

衆生は、如来様のいらっしゃることを日頃は全く気にも留めず、仰せに背を向け逃げ惑っております。

その後ろから、追えとり、ひとたび取りて永く(永久に)捨てることがないと仰せ下さって懐に搦め取って下さるのが阿弥陀様そのお方だったのであります。

「不請の友」とは、衆生が「如来様いらして下さい」とお願いするよりも先に、如来様の先手で衆生のもとにお運び下さる趣旨を申します。

衆生という衆生が如来様に背を向けているのに、重ねてこれを受けとめ抱え上げてすくくと立ち上がって下さるのです。

「群生(ぐんじょう)を荷負(かぶ)してこれを重担(じゅうたん)とす」と言うのはこの有様を云うと窺われるのであります。

### 続いてお念仏させて戴きましょうね

なぜなら浄土真宗のお念仏は、如来回向の大作だったからです。

第十八願のお念仏は、如来様のお手許で「法の働き」として成就されたお念仏であって本願力回向して下さったのですから、衆生がこれを受けとめて称えるときには、「衆生」は、大行が働いて下さる場になるからであります。

ですから称えれば、直ちに聞こえて下さる「南無阿弥陀佛」こそは、如来様そのお方がお喚び声になって衆生を喚び続けていて下さるはたらきそのものだったということになるのであります。

### 梯 實圓和上はどのようにご覧遊ばしたか

曾て不肖は、梯 實圓和上から行信教校のご講義で次のように承りました。

一、ご常教の欠陥は、法の次元である「行」を機の次元で捉えたこと(報恩感謝は、機の次元である)にある。これは教学の乱れを来す(Ref2013年1月ご講義)。

二、親鸞聖人の「信」は、念仏往生の願に基づく救いが、

- ・ いつ確定するか(時剋釈)、
- ・ そのときの機の相状はどのようなものであるか(信相釈)を明確化された概念である(Ref2013年4月20日ご講義)

不肖には、教学上の乱れを糺す上では、梯 實圓和上の御解釈が本質的に重要と解されるのであります。

法の働きと機の上の事象と構造的に捉えることが大事だったので。

如来様は、苦悩の衆生を救わんが為にお手許で如来様の大行(法の働き)を成就され、衆生に回向して下さっていたのです。

それ故、衆生はただ「さようか(信相)」と頭を垂れ、仰せのままに大行(お念仏すること)を行ずればよかったのであります。合掌。

仏壮お聴聞の会(ご法話会)九月一日(日)二十時より

仏教婦人会例会 九月十六日(月)十九時半より

彼岸会二十二日(日)十四時、十九時半、二十日徳勝寺、二十一日法泉寺、二十三日徳善寺、二十四日種徳寺

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥